

デンマークの保育者養成における「エージェンシー」の育成の 反映の実際

— VIA University College のインターナショナルコースの事例を基に —

The Practice of Developing “Agency” in the Training of Danish Childcare Workers:
Based on the Case of the International Course in VIA University College

上 田 星 *

Abstract

This paper aims to clarify how “agency” is developed in the training of childcare workers (Pædagog) by examining the curriculum and practice at VIA University College (VUC). Firstly, it organizes the current status of Pædagog in Denmark. Secondly, it presents an overview of the Pædagog training curriculum published by VUC. Thirdly, it examines the actual practice at the international course in VUC.

It is clear that the acquisition of democratic values and experiences, through the accumulation of interactions and dialogues within the community, generated by “creative and aesthetic activities”, is considered an important aspect of pedagogical training in Denmark.

In addition, it is believed that the transmission of democratic values and attitudes to the next generation occurs when Pædagog, who have acquired these values and attitudes, take charge of early childhood education. This paper examines an example of Pædagog training in Denmark, but it is limited in that it does not consider the actual practices of regular students. Moreover, the actual training practices beyond VUC need to be considered. These challenges remain for future research.

キーワード：保育者養成、デンマーク、ペダゴグ、エージェンシー、養成カリキュラム

1. 背景と目的

21世紀における大きな傾向（メガ・トレンド）として移民の増加や地球温暖化による環境の変化、女性の社会進出による家族形態の変化等が挙げられるが、課題の多くは複雑に絡み合い、様々な人々が関わっており、課題を解決していくためには異なる価値観や考えをもつ多様な人々を結びつけ、共に力を合わせて改善へと向かうことが必要とされている。Education 2030は上記のような国際的なメガ・トレンドに対応した保育及び教育を考える上で、ラーニング・コンパスを掲げており、「エージェンシー（Agency）」を重要な概念として位置付けている。ラーニング・コンパスにおけるエージェンシーとは、社会学や心理学等特定の学問分野に依拠するものではなく、「変化を起こすために、自分で目標を

設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」（OECD 2019）と記されるように、広い意味をもつ概念として定義されており（白井 2020）¹⁾、自分たちが理想とする未来の実現に向けて、受動的な態度で行く末を見守るのではなく、自らが行動を起こすことによって、複雑に様々な要因が絡み合う課題に対して変化を生み出す必要があることを意味している。また、エージェンシーは他者や社会との関係性の中で育まれるのであり（Schoon 2018）、他者との相互の関わり合いの中で意思決定や行動を決めるものとされている（白井 2020）。つまり、複雑に絡み合う混沌とした社会課題に対して、様々な人との関わりを通して、一人ひとりが意思決定を行い、実際に実現したい社会に向けて行動するという、エージェンシーの育成がこれからの時代における保育及び教育においても強く求められていると言えるので

* Sei UEDA 関西学院大学教育学研究科研究員

ある。

国民一人ひとりが社会の変革に向けた行動が出来るようになるためには経験の積み上げが必要不可欠であり、上記のような意識を醸成していくためには多くの時間を要することが予測され、早急に変革に向けた歩みを進める必要がある。一方で、日本における保育の現状に目を向けると、エージェンシーの育成という観点においては、保育カリキュラムが目指す内容と実際の保育の間には乖離が生じている。日本の幼稚園教育要領「第1章 総則」においては、「幼児期の教育は（中略）環境を通して行うことを基本」としており、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として」教育が行われる必要があり、保育者は「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」と明記されている。また、保育所保育指針「第1章 総則」においても、「子どもが自発的・意欲的に関わるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること」と記されているように、文言を見る限りでは子ども自身が環境へ主体的に関わることを通して展開される活動を中心に保育が行われることに対して、十分に積極的な姿勢がうかがえる内容となっている。一方で実際には、保育者主導による一方的な関わりの特徴を有する活動が多く設定され、子ども自身の意思決定により、身近な社会に影響を与えることが出来る経験の機会が極めて乏しい保育施設が少なくないことも現実であり、乳幼児期から先述した意識の基礎を育むための機会が少ない現状にあると言える。上記の現状を踏まえると、今後求められる先述したエージェンシーの育成に向けて、新たな知見を得ることが改善に向けての一歩となると考えられる。

そこで本稿では、諸外国からの知見を得るために、エージェンシーの育成に重点を置いてきた「デンマーク」を対象にする。デンマークにおける教育の基本理念は、国民一人ひとりが社会を構成する一員として主体的に社会のあらゆる物事の決定に参加し、連帯と責任をもって社会を支えていくことが出来るようになることである。特に保育及び幼児教育においては、「子どもたちに共同決定や連帯責任、民主主義における理解と経験の機会を与えること」

(Børne- og Undervisningsministeriet 2020) が保育目標として設定されており、この一環として「保育施設が子どもの自立や共同体の一員となる能力、デンマーク社会への結合を促進することに貢献する必要がある」(Børne- og Undervisningsministeriet 2020) とされている。デンマークでは2018年に保育の枠組みとなる保育カリキュラム (Pædagogisk Læreplan) の改定が実施され、社会的及び経済的、文化的背景等を踏まえた多様なニーズが十分に考慮されてこなかった課題の改善に向けて、調和的な発達が目指されるようになったが (Danmarks Evalueringsinstitut 2012)、先述した保育目標の箇所については改定前の保育サービス法 (Dagtilbudsloven) から継続して現在においても保育の根幹に据えられている。つまり、実現したい社会に向けて国民一人ひとりが常に身近な社会において共同体を構成する人々との連帯を意識して行動することが出来るように育ちを支えていくことが、保育理念の柱として据えられているのである。

デンマークにおいては先述した保育目標を達成するために、「創造的・美的活動」が重要な位置付けとされている。源流を遡ると、デンマークにおける3番目の保育者養成校を設立したソフィエ・リフビャウ (Sofie Ribbjerg, 1886-1981) によって、子どもの育ちにおける「創造的・美的活動」の重要性が主張され、その後のデンマークの保育者養成に影響を与えてきた。リフビャウは子どもが他者と共に自らを発達させていくことが出来るような環境を構成し、子どもの自発性を尊重することに保育者としての仕事の基礎を置くべきであると考えており (Ribbjerg 1969)、創造的で美的な活動を通じた学びを人間形成のプロセスにおける重要な部分として位置付けていた²⁾。芸術的な表現に対して高い優先度を有することは、子どもたちの自然な身体的で、活動主導で、実験的な遊びや学びの形式を促すことを意味しており、デンマークでは上記のような活動を通して子どもたちは他者との協力や関わり方等の経験と知識を獲得していくと考えられており (Ringsmose et al. 2017; Kidd et al. 2010)、直接的な指導によって学ぶことが最善ではなく、日々の生活の中での創造的な活動を通して、他者 (保育者と友だち) と「一緒にいること (Samvær)」によって学ぶことが最善であるとされているのである (Ringsmose et al. 2017; Hansen 1997)。言い換える

と、日々の保育の中で生じる「創造的・美的活動」を媒体として共同体の中に他者と一緒にいるという状況が生み出され、共同体の中で生じる他者との対話を通して、民主的な価値や態度を獲得することが出来ることを意味しているのである。

上記の構造が意識されながら、子どもたちは日々の保育の中での関わりを通して、保育者の専門的な援助を受けながらエージェンシーを育てているのである。そして、保育者は「創造的・美的活動」のための機会を提供する文化的なファシリテーターとなり、他者と一緒にいることによって子どもたちが知識やスキル等を獲得出来るように援助することが重要な役割であるとされている (Ringsmose et al. 2017; Ploug 2007)。

日本は保育カリキュラムの改定を重ね、保育者主導に偏る保育方法から子ども主導の遊びに重点を置いた保育の充実へ向けて、変革を図っている段階にあるため、カリキュラムが示す内容と実際の保育の形態に乖離がある保育施設が一定数存在していると考えられる一方、デンマークは経済協力開発機構 (OECD) の Starting Strong II における保育カリキュラムの特徴において、生活基盤 (ホリスティック) 型の特徴を有するカリキュラムにも分類されるように、権利の主体としての子ども、あるいは自分自身の学びの方略をもった有能な子どもとしての子どもを親を前提とし、子どもの今の発達段階と興味を援助することを中心に置いた保育の方法が一般的な形態として採用されている (泉 2017)。また、保育カリキュラムの導入及び改定の過程を概観しても、主な契機は、先述した日本の現状のように、保育方法の変革を目指したことが背景にあるのではなく、カリキュラムの内容が多様に解釈されたことにより、偏った保育内容の提供が行われていた現状に対して改善を求めるといふ、学びの内容に焦点化された点にある (Børne- og Undervisningsministeriet 2018)。つまり、デンマークでは保育カリキュラムの導入前から、本稿の焦点であるエージェンシーの育成の観点においては、重要性が維持されており、保育カリキュラムが前提とする保育形態と現場の保育との乖離が無いとまでは言い切れないものの、ある一定の共通理解は国全体において得られていると考えられる。

しかしながら、子どもたちの人間形成の過程を支える上で重要な存在である、デンマークの保育者に

該当するペダゴグ (Pædagog)³⁾が、子どもたちのエージェンシーの育成に向けて養成段階においてどのような内容の養成教育を受けて保育現場に輩出されているのかについては、十分に検討されていない。日本においては以下の先行研究において、デンマークのペダゴグ養成の内容について報告されてきた。デンマークのペダゴグ養成には大きく分けて3つの領域 (①保育及び幼児教育②学校及び余暇教育③臨床教育) があり、代表的な研究としては鈴木 (2006)、齋藤修 (2008)、齋藤正典 (2010)、小谷 (2010)、(2012) が挙げられる。齋藤修 (2008) は国民学校の就学前学級 (børnehaveklasse)⁴⁾に着目し、ペダゴグの養成カリキュラムについての概略等を報告している。齋藤正典 (2010) は①保育及び幼児教育の領域におけるペダゴグ養成カリキュラムについて、養成校の一つであるリルベルト大学 (University College Lillebælt) に着目し、養成カリキュラム全体の概要について報告している。鈴木 (2006) は②学校及び余暇教育の領域におけるペダゴグの養成の概略について論じている。小谷 (2010) は③臨床教育の領域におけるペダゴグ養成カリキュラムについて、インターナショナルコースに在籍した経験を基に具体的な内容を報告している。また、小谷 (2012) はペダゴグ養成カリキュラム及び保育者へのインタビュー調査、実習経験を基にデンマークのペダゴグの専門性について検討しており、長期の実習期間が設けられ、理論と実践の密接な結びつきが図られていること、子どもと保育者の豊かな創造力を生み出すための感覚的 (芸術的・活動的) 科目が充実していることを特徴として挙げている。

先行研究を概観すると、本稿が対象とする①保育及び幼児教育の領域におけるペダゴグ養成に関しては、養成カリキュラムの全体的な概要と2つの特徴 (「理論と実践の相互作用」及び「創造的かつ美的活動の充実」) について明らかにした研究が見られるものの、研究が報告されてから10年以上が経過しており、その間にデンマークの保育及び幼児教育の枠組みとなる保育カリキュラムが改定されていることを踏まえると、デンマークにおけるペダゴグ養成カリキュラムの現状を確認しておく必要がある。さらに、ペダゴグ養成における学生の具体的な学びの姿については、小谷 (2010) が③臨床教育の領域についての事例を一部示しているものの、①保育及び幼

児教育の領域においては十分に言及されておらず、冒頭で論じたデンマークの保育及び幼児教育における「エージェンシー」の育成が、ペダゴギー養成においてどのような形で反映されているのかについては十分に検討されていない。

以上を踏まえ、本稿では第一にデンマークにおけるペダゴギー養成制度について論じる。第二に、本稿が対象とするペダゴギー養成を担う VIA University College (以下、VUC と略称) のペダゴギー養成カリキュラムを基に、ペダゴギー養成の全体像を示す。特に、本稿における焦点である「創造的・美的活動」に着目し、関連のある箇所について提示する。第三に、VUC のインターナショナルコースにおける事例を基に、ペダゴギーを志す学生の学びの姿について提示する。最後に、上記の内容を踏まえた上で、デンマークの保育及び幼児教育における「エージェンシー」の育成が、ペダゴギー養成のどのような点において反映されているのかについて考察する。

先行研究(斎藤 2010)(小谷 2010, 2012)ではリルベルト大学を対象とした養成プログラムの検討が行われているが、本稿が対象とするのは VUC である。理由として、VUC はデンマークの中で最も学生数が多い職業専門大学 (professional bachelor's programmes) であり、デンマークの中で最も多くのキャンパスでペダゴギー養成プログラムを受講することが出来、毎年多くのペダゴギーを卒業生として輩出している。VUC はデンマークにおいてペダゴギー養成を代表する職業専門大学であることから、本稿の主題であるペダゴギー養成の実際について検討する上でより適していると判断し、本稿では VUC のペダゴギー養成を対象とする。

2. デンマークのペダゴギー養成制度

デンマークの高等教育機関は長期高等教育である大学 (University)、中期高等教育の職業専門大学、そして短期高等教育の職業教育大学 (Academy profession programmes) の3つに分類され、ペダゴギー養成は職業専門大学で行われる。大学は学士号の取得及び、それに続く修士号、博士号への取得に向けた基礎づくりを目的としている。職業教育大学はビジネスや旅行といった地域産業に関するプログラムを主に提供しており、2年間でのディプロマ取得を目的としている(斎藤 2010)。一方、デンマークにおける職業専門大学は、教育や医療、建設、ビ

ジネス、映画等、幅広い職種に関わる学習プログラムを提供しており (Danske Professionshøjskoler 2023a)、中でもペダゴギー養成プログラムはデンマークで最も規模が大きく、人気のある学士プログラムとして位置付けられている (Danske Professionshøjskoler 2023b)。ペダゴギーの主な職域は保育施設、就学前学級、放課後教育施設 (SFO: Skolefritidsordning)、老人福祉施設、障がい者施設等の社会福祉分野における施設全般であり、その他にホームレスや薬物乱用者、精神症患者、親のアルコール依存や薬物依存等の理由により施設に入っている子どもたち、ADHD や自閉症等の発達障害がある子どもたち、デンマーク語習得に課題がある移民の子どもたち、発達障害のある成人のケア等、年齢を越えて社会的に弱い立場にある人々を対象に様々な支援を行うことを担っている職業である(小谷 2010)。

2023年時点では、デンマークに存在する計6校⁵⁾全ての職業専門大学においてペダゴギー養成プログラムが開講されている (Børne- og Undervisningsministeriet 2023)。ペダゴギーを養成する職業専門大学には、共通の必修科目が設定されており、必修科目以外は各職業専門大学で独自に設定することが出来るため、各職業専門大学で個性的なカリキュラムが構成されている⁶⁾。

3. VUC におけるペダゴギー養成カリキュラム

デンマークのペダゴギー養成カリキュラムは教育研究省 (Uddannelses- og Forskningsministeriet) の定める「ペダゴギーの学士号専門職の養成法 (Bekendtgørelse om uddannelsen til professionsbachelor som pædagog)」に基づいて各職業専門大学が独自の特徴を活かしたカリキュラムを構成している。そこで本稿では VUC が発行するカリキュラム「Studieordning VIA Pædagoguddannelsen 2019」(VIA University College 2019) を基に、VUC におけるペダゴギー養成プログラムを概観する。尚、本稿ではペダゴギー養成の実際について論じる箇所(後述)が2019年度の内容であることから、本稿における内容に一貫性をもたせるために、2019年度におけるペダゴギー養成カリキュラムの資料を使用する。2019年度から現在に至るまでペダゴギー養成カリキュラムに関する改定が実施されていないため、最新版の養成カリキュラムと比べて

内容に大きな変更はないものの、多少の相違がある点については留意する必要がある⁷⁾。

1) VUC の教育理念

VUC におけるペダゴギー養成では、以下の4つの理念が掲げられている (VIA University College 2019)。

- ① 実践のみならず、自身が習得した理論と繋ぎ合わせながら、実践を振り返り、次の実践へ活かすことが出来る。
- ② ペダゴギーは人と関わる関係的な仕事であるため、知識一辺倒になるのではなく、保育や教育の高い質を担保するために必要である、創造的、感覚的、身体的な活動についても、養成期間の中で献身的に他者と参加することを求める。
- ③ ペダゴギーという職業は日々の仕事の中で職場内だけに留まらず、他分野や研究者等と共同的な学びを育むためのコンピテンシーを育成する。
- ④ 発展が急速な教育分野において、常に新しい知識やスキルが求められるため、VUC では実験や発展、革新的なことに対しては高い優先権を有する。

以上の4つの理念を概観すると、日々目の前で展開する子どもたちの活動に対して、ペダゴギーには専門的な判断が常に求められるのであり、判断をする際、目の前の近い関係 (日々の実践) だけを見るのではなく、社会的な広い観点も兼ね備えられている必要があることが明記されており、近い関係と社会的な広い観点の両方から専門家としての判断が出来るような保育者としての専門性を育成することが VUC におけるペダゴギー養成の目標であると考えられている。特に実践に関しては「創造的、感覚的、身体的な活動に献身的に他者と参加すること」が、高い保育の質を保つために必要であると具体的に記されており、先述したように、「創造的・美的活動」がペダゴギー養成においても重要な位置付けであることが示されている。具体的な授業の実際を検討する前に、VUC におけるペダゴギー養成プログラムの概要について、以下に示す。

2) VUC のペダゴギー養成プログラムの概要

ペダゴギーの資格を取得するためには、3年半で7セメスターの課程を修了し、210ECTS⁸⁾を取得する必要がある。ペダゴギー養成カリキュラムは「必修科目 (社会教育の基本的な専門家としてのコンピテンシー)」と「専門科目 (3つの専門分野科目・選択科目・実習・学士プロジェクト活動)」から構成されており、「必修科目」は70単位 (最初の実習での10単位を含む)、「専門科目」は140単位である。「専門科目」の中では、3つの領域「①保育及び幼児教育 (Dagtilbudspædagogik)」、「②学校及び余暇教育 (Skole- og fritidspædagogik)」、「③臨床教育 (Social- og specialpædagogik)」から1つの領域を専攻する必要がある。

カリキュラムは Module⁹⁾毎に区切られており、各 Module は様々な方法で教育的な実践を基にした学習活動で構成され、実験的かつ探索的なアプローチ、関係者 (学生や教員等) との協働が特徴とされている。本稿では3つの専門領域の内、①保育及び幼児教育のカリキュラムの構成について「表1」に示す。

また、学生は養成期間の間に様々な学習活動に積極的に参加する機会が設けられており、「図1」に示すような学習サイクルを通してペダゴギーとしての専門的な学びを獲得していくことが目指されている。単に教員が学生に身に付けて欲しい内容を一方的に教えるのではなく、学生同士やプログラム外のパートナー (実習担当者等) と協働した教育活動が、教員のみならず学生主導によって行われることにより、学生がペダゴギーとしての専門的な能力を習得出来るように設定されているのである。

4. ペダゴギー養成における学生の学び： VUC のインターナショナルコースの 事例を基に

本節では「創造的・美的活動」がどのように授業内において位置付けられているのかについて着目し、その具体的な事例について提示する。本稿では2019年度に VUC のラナース (Randers) キャンパスにおいて、1セメスターの期間 (2019年9月1日～2020年1月31日) に開講された交換留学プログラム (Early Childhood and Preschool Teaching) を対象とする。本プログラムには6ヶ国から13名が参加しており、参加者の出身国の内訳は、イタリア (1

表1 VUCにおけるカリキュラムの概要

年次	学期	試験 (Module)	コンピテンス目標
1	1 sem	GK 1 (Module 1, 2, 3)	子ども、若者、青年の能力や視点を基に、学生は子ども、若者、青年を援助する環境や活動を創造し、省察し、評価することが出来る、その専門的な省察や選択に対して自分で説明出来る。
	2 sem	GK 3 (実習 1 回目)	施設での実習への参加を通して教育的な活動を説明し、計画し、実施し、評価することが出来る。自身の実習の経験を省察する。
	3 sem	GK 2 (Module 4, 5, 6)	社会的、歴史的、施設的、専門的な文脈について、専門的に教育の仕事の説明することが出来る。
2	4 sem	SK 3 (実習 2 回目)	個々の子どもとの関係の築き方、またグループに対しての関係の築き方について知り、子どもたちが互いに関係を築くことが出来るように援助することが出来る。また、自分自身も専門的なコミュニケーション能力を習得し、自分自身のコミュニケーション能力や人間関係を振り返ることが出来る。
	5 sem	SK 1 (Module 7, 8)	0～5歳児の発達や学びのプロセスを創造するために、自然や文化的なメディア、表現形式を活用し、さらに遊びや教育的活動に子どもの視点を取り入れることが出来る。
3	6 sem	SK 4 (実習 3 回目)	子どもの幸福、学び、教育、発達を支援する活動や学びのプロセスについて目的をもって組織し、実施し、記録し、評価することが出来る。上記の点に関連して、学生は専門的な立場から既存の実践に対して挑戦し、教育実践の発展に貢献することが出来る。
	6 sem	VO (Module 9, 11)	創造的な経験と学びのプロセスの可能性を生み出し、導き、発展させることが出来る。これは、人々が音楽的、美的表現と文化的努力で創造的に働くことを援助し、刺激する。
4		TPE (Module 10)	専門領域や分野を超えたジレンマや潜在可能性を認識し、分析し、振り返ることが出来る。また、横断的な協働プロセスに参加し、調整し、主導することが出来る。
	7 sem	SK 2 (Module 8, 12)	教育的な仕事について、振り返り、省察し、説明することが出来る。
		BA (学士プロジェクト活動)	社会教育の領域内で、専門的な研究課題に対して認識し、考察し、視点を追加することが出来る。

注：VUCの養成カリキュラムを基に筆者が独自に作成

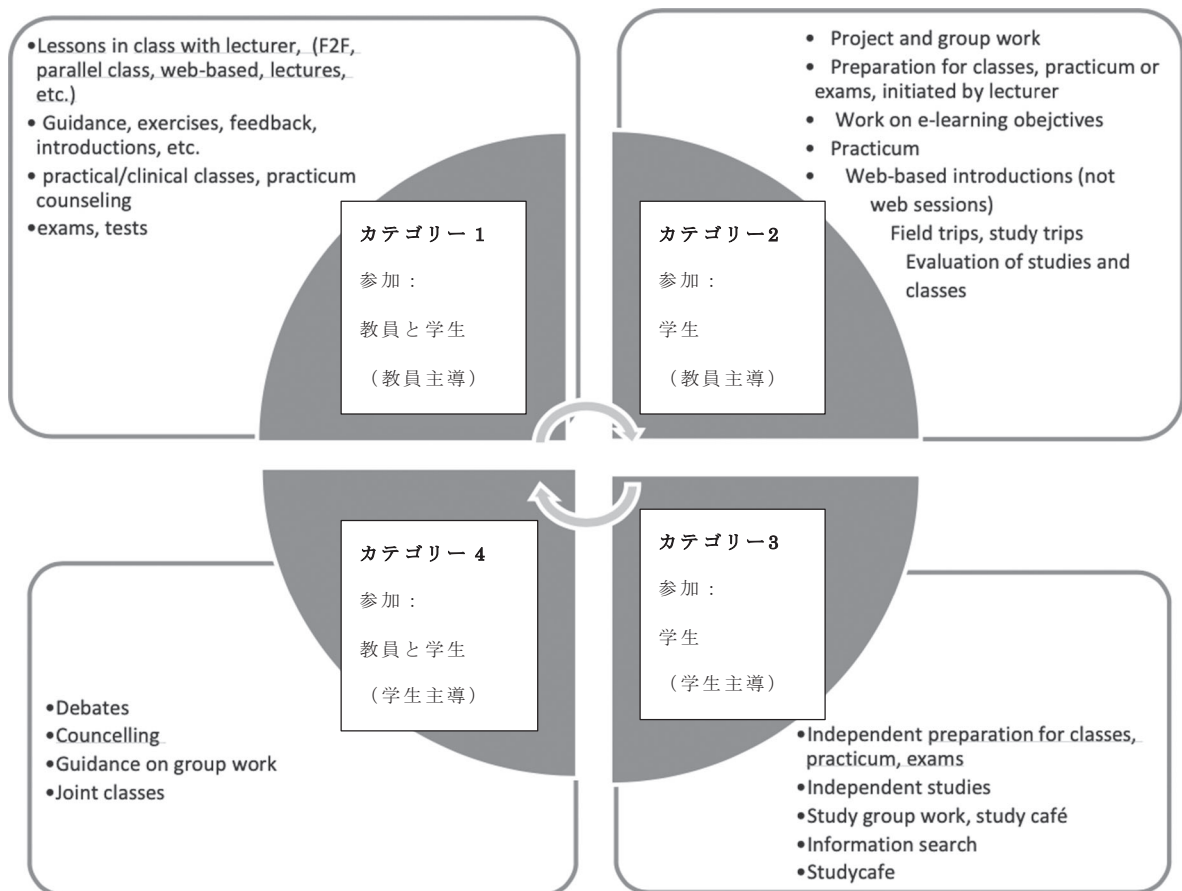


図1 学習活動モデル

名)、スペイン(1名)、ドイツ(1名)、デンマーク(4名)、ハンガリー(1名)、日本(5名)である。本クラスは主に各国からの留学生で構成されているが、通常のペダゴジー養成プログラムに基づいて行われるため、授業形式及び試験形態は同様とされている。本プログラムでは、養成カリキュラム内にある3つの形式の試験(グループプレゼンテーション、個人試験、実習関連)を全て経験することが出来、セメスターの後半には約1ヶ月間の実習が含まれている⁹⁾。

本プログラムは必修科目である①「Professional judgement, knowledge and ethics (10 ECTS)」(以下、Module 6 とする)、専門科目である②「Childhood, culture and learning (10 ECTS)」(以下、Module 7 とする)、③「Relation and communication (10 ECTS)」(以下2nd Practicum とする)の3つのModuleで構成されている。本稿では上記の3つの科目の内、「創作的・美的活動」を媒体としたグループワークによる協働の実際についての具体的な姿が見られたModule 6 及びModule 7 を対象とし、その内容について提示する。尚、2nd Practicum については、主に個人ワークであるため、他者との協働を通したエージェンシーの育成に着目する本稿の趣旨と異なる内容のため、本稿では対象から除外する。

1) Module 6 : 「専門的な判断・知識・倫理

(Professional judgement, knowledge and ethics)」

① Module 6 の概要

Module 6 は学生自身の実践の経験を基に、理論と実践の関係を結びつける機会を与えることに焦点化している。Module 6 はGK 2を構成するModuleの一つであり、コンピテンス目標は「社会的、歴史的、施設的、専門的な文脈について、専門的な教育の仕事の説明することが出来る」ことである。主な授業内容としては、「保育の質」、「保育者の専門的な判断」、「子どもの視点」、「アウトドア」等が挙げられる。

② 「創作的・美的活動」を媒体としたグループワークの実際(1)

本プログラムにおける参加者は13名のため、3～4名で構成されたグループに分かれて議論をする機会が毎回設けられている。グループワークの一例として、発祥地として有名なレゴを用いたレゴタイム

(LEGO TIME)が挙げられる。用途は様々であるが、本授業内では「自らにとっての良い学びの環境」をテーマに、レゴを用いて表現するグループワークが行われた。一人ひとりに多種多様なレゴが入った袋が配られ、自分に与えられている限られたレゴのパーツを使って、自らが考える良い学びの環境を表現し、グループディスカッションを行う活動である。このような活動のプロセスは、各地域や保育施設に与えられた資源の中からより良い環境を創造するために出来ることを探し、表現するという、保育者に求められる一つの重要な資質であるプロセスと類似する営みであるという点において、意義がある活動として捉えられている。単に教員に提示されたテーマで話し合うのではなく、自らで創造した表現活動を通して浮かび上がった様々なアイデアを他者に共有し、そこで様々な考えがあることに気づき、時に気になる点について議論し合いながら学びを深めていく姿が見られた。また、自分が欲しいパーツがあった場合には、その思いを相手に伝えてパーツを交換し、自らの理想とするものを創造していくという、他者との協働を中心とした学生なりの工夫を活かした活動の発展も見られた。

上記のグループワークの他にも、実際に学生同士で近隣の街に足を運び、実際に育児をする親の子どもへの関わりを観察し、親の言動にどのような教育的視点が含まれているのかについて、保育者の観点から考えてグループで話し合う活動や、幼稚園へ視察に訪れて保育者と直接対話する機会、市が運営するアウトドア施設(Nature center)での飯盒炊爨、粘土アート体験等、座学で理論を学ぶだけでなく、実際に自分の五感を通して体験し、学んだことを学生や教員同士で互いに意見を交わし合い、学びを自



図2 LEGO TIME (筆者撮影)

分のものにしていくという、VUCの特徴の一つでもある「理論と実践の相互作用」を軸とした授業形式で行われた。上記のような活動経験を本Moduleの期間を通して積み上げ、最後には試験が実施される。

Module 6の試験は、3～5名で構成されたグループに分かれ、ポートフォリオを作成し、ポートフォリオを基に指導教員と議論をするという形式で行われる。Module 6のコンピテンスの到達目標は、先述したように、保育者として必要な「判断」や「説明責任」等を身につけることであるため、ポートフォリオの内容は、学生同士でアイデアを出し合い、実際に保育現場で起こり得る事例を考え、保育者としてどのような援助が出来るかということについて授業で扱った様々な理論を用いて導き出していくのである。また、その援助が必要な根拠についても、デンマークの法律や保育カリキュラムの内容から引用して論じる。デンマークの法律や保育カリキュラムを扱うため、本プログラムでは各グループにデンマーク人の正規学生が配置されるように構成されていた。

本稿では筆者が参加したグループの事例を紹介する。筆者のグループは「アルコール中毒で飲酒による虐待の疑いがある母親がいる家庭で育つ子どもに対する支援」に焦点を当て、子どもの絵画から虐待の様子が推測された場合、ペダゴギーはどのような対応をとる必要があるのか、またどのような根拠に基づいて支援が行われるべきなのかについてグループで議論を重ね、発表することを試みた。

試験のプレゼンテーションでは、冒頭でModule 6のコンピテンス目標とデンマークの幼稚園の歴史を紹介し、次に同グループの学生で撮影した事例映像を流した。さらに、本映像における課題について提示し、それに対する援助の根拠を授業で学んだ内容やデンマークの法律等を基に解説した。最後に、今後の課題として事例の内容が多少変化した場合（飲酒した母親が暴力的に保育者に関わろうとしてきた場合の対応等）には、どのような対応が余儀なくされるのかについて議論した内容を発表した。試験は指導教員2名に向けてポートフォリオを基にプレゼンテーションを行い、評価は7段階で行われた。

Module 6では授業及び試験において常にグループワークが実施されていたため、クラス全体で活動

していくために、絶えずグループワークへの参加と連帯の責任が求められる。そして、グループ内で一人ひとりが自らの意見を出し合い、対話を通して導き出した合意の結果としての選択に対して、各々が責任をもって他グループの学生や教員に表現することが求められていた。こうした一連の活動を繰り返し経験する中で、民主的なプロセスを通して他者と協働して行動していく上で必要な資質や能力の獲得に向けた経験の積み上げが行われていることがうかがえる。

2) Module 7 : 「幼児期・文化・学び (Childhood, culture and learning)」

① Module 7 の概要

Module 7はSK 1を構成するModuleの一つであり、子どもの発達や幸福、形成、学びを援助する文化や自然、美的表現を含んだ教育的な実践をねらいとしている。コンピテンス目標は「0～5歳児の発達や学びのプロセスを創造するために、自然や文化的なメディア、表現形式を活用し、さらに遊びや教育的活動に子どもの視点を取り入れることが出来る」ことである。主な授業内容としては、「美的経験と学び」、「遊び」、「言語発達」、「認知発達」等が挙げられる。

② 「創造的・美的活動」を媒体としたグループワークの実際 (2)

美的表現に関する科目では、3～4名で構成されたグループになり、美術室にある物を使って保育施設における学びの環境を創り、配慮した点や期待される学び等について話し合う活動や、自分たちの理想とする街づくりを通して社会について考える活動



図3 理想の街づくり (筆者撮影)

等を行った。上記の活動において、「保育施設における学びの環境」や「理想の街づくり」を考える等、自由度の高いテーマのみが設定された課題であるため、同グループの学生と話し合いながら、一人ひとりの美的表現やアイデアを組み合わせることで協力を創造していきことが求められた。

Module 7 の試験は、Module 6 と同様、3～5名で構成されたグループに分かれるが、まず初めに、各々が実際に保育施設へ子どもの観察を行う。次に、各々が興味をもった場面を同グループの他の学生に共有し、その中から1～2つのテーマを決め、Module 6 と同様に、授業内や自学習で学んだ理論や法律等を用いながら資料を作成し、プレゼンテーションを実施する。筆者のグループでは食事場面に興味をもつ学生が多かったことから、保育施設における食事形態に着目し、自国の現状を紹介しながらプレゼンテーションの実施を試みた。プレゼンテーションの主な内容は、同グループの学生がデンマークの保育施設において観察した「食事前の5分間の静寂」について、子どもの育ちの観点から利点及び改善点を考察した点、そして柔軟な時間に食事が出来る弁当が決められた時間に栄養バランスの取れた食事が出来る給食かの選択について、自国の現状を基に比較及び考察した点である。

試験には Module 6 とは異なり、全グループと指導教員が参加し、質疑応答は指導教員だけでなく、同席する学生からも行われた。質疑応答の間は、指導教員も学生と同じ立場で意見を出し合い、議論を行った。他グループの学生から自国の子どもを取り巻く食事の現状についての意見が交わされ、より広い視野で自らの課題を捉え、省察する姿が見られ、評価は合否の二択で実施された。

5. 全体考察：デンマークのペダゴジー養成における「エージェンシー」の育成

本稿の目的は、デンマークの保育及び幼児教育における特徴の一つである「創造的・美的活動」に着目し、保育の担い手であるペダゴジーがどのように養成されているのかについて、エージェンシーの育成の視点から養成の実際について検討することを通して、その一端を明らかにすることであった。そこで本稿では第一に、デンマークにおけるペダゴジー養成の現状について整理した。第二に、VUC におけるペダゴジーの養成の概要について VUC が発行するカ

リキュラムを基に提示した。第三に、筆者が実際に受講した VUC のインターナショナルコースにおける学びの実際について報告した。以上を踏まえ、ペダゴジー養成における「エージェンシー」の育成との関連について、以下に論じてまとめとする。

デンマークにおいては、個と連帯のバランスを保ちながら、国民一人ひとりが社会の構成員として主体的に社会に参画することを目指していることが教育の根幹として位置付けられていることについて冒頭で論じたが、ペダゴジー養成の学びの実際を概観すると、学生の「創造的・美的活動」を媒体として学生同士が自らの意見を交わし合い、協働する姿が特徴的であったことがうかがえる。また、自由度の高い課題の設定やグループによる共同作成での試験形態等により、学生一人ひとりの参加の責任が課せられ、自己決定のみならず、協同決定、そして連帯が強く意識された構成内容であったと考えられる。授業内において設定された「創造的・美的活動」を通して、学生が自らの興味や関心を他者に表現し、個々の表現の権利が保障されながらも（自己決定）、対話を通して互いに合意点を見出し（協同決定）、共同体の中で決めた内容に関しては責任をもって取り組む（連帯）という姿は、デンマークにおける民主主義の在り方を示しており、身近な共同体で上記のような経験が養成の至る所で積み上げられていたと言える。

以上のように、「創造的・美的活動」を媒体とした共同体の中での対話による他者との関わり合いの経験の蓄積を通して、民主的な価値と経験を身に付けていくプロセスがあることが、ペダゴジー養成段階においても重要な位置付けとされていることが明らかになった。また、デンマークのペダゴジー養成で見られた学びの姿は、デンマーク国民が幼児教育から高等教育に至るまで一貫して行われてきているが、その最初の段階である幼児教育を担うペダゴジーに関しても同じ形式で養成され、同様の学びの形式を基に現場の保育へと還元していくという循環が存在していることが明らかになったと言える。

デンマークのペダゴジー養成における学びの実際を検討することを通して、乳幼児期から個々の参加の権利が保障されながらも他者との対話を通して互いに合意点を見出し、共同体の中で決められた内容に関しては責任をもって取り組み、その選択が身近な社会に影響を与えられることを経験することが重要

であると考えられるが、現場の保育と養成教育との繋がりを意識して一体的にエージェンシーの育成に向けて尽力する必要性があることが示唆された。いかなる社会、文化、文脈においても常に妥当するようなエージェンシーの統一的な概念は存在せず、あくまでも文化的かつ社会的な文脈を前提にした概念であることに留意する必要があるが（白井 2020）、現場の保育と養成教育との繋がりを意識してエージェンシーを育成していくことが重要であることが示唆された点は、本稿において他国の事例を提示することによって示された重要な知見であったと考えられる。

日本においては、「環境を通じた保育」が保育の根幹に据えられていることを冒頭で確認したが、子ども自身の考えを基にした様々な環境（ヒトやモノ）との関わりの中で、新たに遊び（創造的・美的活動）が生まれ、友だちや保育者、時には生き物が遊びの構成者となり、遊びの中での構成者との関わり（対話）を通してより広く、深い学びへと誘っていくという構図は、日本においても重要な点として位置付けられる。しかし、保育を担う保育者が上記のような経験の蓄積が不十分であると、実際の保育においても同様のプロセスで子どものエージェンシーを育成していくことは難しいことが想像される。養成教育と保育現場の繋がりを意識した保育学生のエージェンシーの育成という視点から、改めて日本の保育者養成教育を見つめ直すことが、日本の保育カリキュラムと実際の保育における乖離を生じさせている様々な要因を改善していくために必要であるという点が、デンマークの保育者養成の実際を検討することを通して示唆されたのではないだろうか。

しかしながら、本稿における内容はデンマークのペダゴグ養成を担う一つの職業専門大学における内容であり、全体を網羅しきれていない点で課題が残されている。また、本稿が対象とした学びの実際は国際コースを対象としており、正規学生の学びとは多少異なることが考えられるため、上記の点の検討については今後の課題とする。

注

- 1) ここでは、課題を自分事としてただ捉えることだけに留まらず、実際に実行して変化を実現する段階まで含意されていることに留意する必要がある。
- 2) 実際に、リフビャウの養成校 (Montessorikursus)

では画家のマチーセン (Egon Mathiesen 1907-1976) が教育に携わっていたことから、当時としては創造的かつ美的な活動がより重要視されていたことがうかがえる。

- 3) 現代のペダゴグ (Pædagog) という言葉は、ギリシャ語の Paidagogos とラテン語の Pedagogus の 2 つの言葉に源流をもっており、古代のペダゴグ (Pædagog) には教えることの義務は課せられていなかったが、学校の教師と異なり、学校に通う子ども (skolebarn) への規範的なしつけに対する重要な役割を担っていたとされている (Korsgaard 2017)。現代におけるペダゴグとは、社会教育指導員 (Social Educator) と訳される資格で、デンマークの社会及び文化に主体的に参加し、その中で社会生活を営んでいけるように人々を支援していく対人援助専門職としての資格である (斎藤 2010)。デンマークでは資格レベルの異なる、ペダゴグ、ペダゴグアシスタント (Pædagogisk assistent)、ヘルパー (Pædagogmedhjælper)、実習生によって保育が行われることが一般的であり (上田 2020)、ペダゴグは以上に挙げた保育者の中では最も資格レベルが高いため、本稿における対象とした。
- 4) 就学前学級 (børnehaveklasse) とは、「0 学年」と称され、国民学校に入学する 1 年前から 1 年間通学することを基本とする学級である。遊びを中心とした社会性の発達や規律の理解を促すことが主な目的とされているが、2012年に就学前学級のカリキュラムが改革されたことにより、アルファベットや数字の学習の導入等、就学準備への傾向も見られつつある (児玉 2016)。
- 5) Københavns Professionshøjskole, UC Syd, VIA University College, Professionshøjskolen UCN, Professionshøjskolen Absalon, UCL Erhvervsakademi og Professionshøjskole の計 6 校である。
- 6) VIA University College の准教授かつ国際コースの責任者 (当時) であった Gorm Fosdal 氏からのヒアリング。
- 7) 本稿で使用する 2019 年版と最新年度である 2023 年版の内容の比較を通して、VUC における理念の一つに持続可能な開発目標を意識した教育が新たに加えられるようになっているが (VIA University College 2023)、本稿の主題とは密接に関係しない箇所であると考えられることから、本稿では 2019 年版の養成カリキュラムを用いる。
- 8) VIA University College の准教授かつ国際コースの責任者 (当時) であった Gorm Fosdal 氏からのヒアリング。
- 9) ECTS とは、European Credit Transfer System の略で、欧州諸国に共通している単位を意味しており、デンマーク国内及び各国の高等教育機関において可能な単位互換制度を指す。
- 10) 1 つの Module は 10 ECT で構成されており、1 セメスター間に 2~3 の Module が設定されている。
- 11) 正規学生には実習期間中、1 ヶ月に 1 度、実習での学びを共有し、振り返るための「学習日 (Studiedage)」が設定されており、学校で実習中の悩みや疑問を他の学生や指導教員に相談することが出来る。

引用・参考文献

- Børne- og Undervisningsministeriet (2018). *Den styrkede pædagogiske læreplan*. København: Ministeriet for Børn, Undervisning og Ligestilling.
- Børne- og Undervisningsministeriet (2020). *Bekendtgørelse af lov om dag-, fritids- og klubtilbud m.v. til børn og unge (dagtilbudsloven)*.
<https://www.retsinformation.dk/eli/lta/2020/2>
 (情報取得2021.9.5).
- Børne- og Undervisningsministeriet (2023). *UddannelsesGuiden: Pædagog*.
<https://www.ug.dk/uddannelser/professionsbacheloruddannelser/paedagogiskeuddannelser/paedagog>
 (情報取得2023.8.1).
- Danmarks Evalueringsinstitut (2012). *Læreplaner I praksis Daginstitutionernes arbejde med pædagogiske læreplaner*. 1-98.
<https://www.eva.dk/dagtilbud-boern/laereplaner-praksis-daginstitutioners-arbejde-paedagogiske-laereplaner>
 (情報取得2020.11.16).
- Danske Professionshøjskoler (2023a). *Uddannelser: Grunduddannelser*.
<https://danskeprofessionshøjskoler.dk/uddannelser/>
 (情報取得2023.8.1).
- Danske Professionshøjskoler (2023b). *Fakta om pædagoguddannelsen: Pædagoguddannelsen*.
- Hansen, M. (1997). *Intelligens og tænkning - En bog om kognitiv psykologi*, in Brogaard-Clausen, S. & Ringsmose, C. (2017). The Professional Identity of the Danish Pedagogue: Historical Root in an Education with Focus on Democracy, Creativity, *Dannelse* and a 'Childhood Logic', in Ringsmose, C. & Kragh-Müller, G. (2017). *Nordic Social Pedagogical Approach to Early Years, International Perspectives on Early Childhood Education and Development*, Vol. 15, 237-252.
- 泉千勢 (2017) 「世界の保育の質改革の動向—21世紀型保育へのチャレンジ」 泉千勢 (編) 『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか 子どもの豊かな育ちを保障するために』 ミネルヴァ書房, 103-126.
- OECD (2019). *OECD Learning Compass Concept Notes*.
<https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/>
 (情報取得2023.8.1).
- Ploug, N. (2007). *Teorier om betydningen af social baggrund og chanceulighed*, in Ringsmose, C. & Kragh-Müller, G. *op. cit.*, 237-252.
- Rifbjerg, S. (1969). *Træk af den moderne opdragelses historie*. København Gyldendals pædagogiske bibliotek.
- 児玉珠美 (2016) 『デンマークの教育を支える「声の文化」—オラリティに根ざした教育理念—』 新評論.
- Kidd, J. K., Pasnak, R., Curby, R., Ferhat, T. W., Boyer, C., Gadzichowski, K. M., et al. (2010). *Cognitive underpinnings of preschool literacy and numeracy*, in Ringsmose, C. & Kragh-Müller, G. *op. cit.*, pp. 237-252.
- Korsgaard, O., Kristensen, J. E. & Jensen, H. S. (2017) *Pædagogikkens idehistorie*, Aarhus Universitetsforlag, Århus: Denmark.
- 小谷正登 (2010) 「デンマークのペダゴギーに関する臨床教育学的研究(1) インターナショナル・コースの内容を中心に」 『教職教育研究』 15, 37-58.
- 小谷正登 (2012) 「デンマークの保育者ペダゴギーの専門性に関する一考察」 『臨床教育学論集』 5, 27-40.
- 齋藤修 (2008) 「デンマークの就学前教育制度」 『盛岡大学短期大学部紀要』 18(31), 13-19.
- 齋藤正典 (2010) 「デンマークにおける保育者 (Pædagog: ペダゴギー) 養成プログラム」 『子ども教育研究』 2, 27-40.
- Schoon, I. (2018) *Conceptualising Learner Agency: A Socio-Ecological Developmental Approach*.
http://www.oecd.org/education/2030-project/contact/Draft_Papers_supporting_the_OECD_Learning_Framework_2030.pdf (情報取得2023.8.1).
- 白井俊 (2020) 『OECD Education 2030プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—』 ミネルヴァ書房.
- 鈴木七美 (2006) 「デンマークの福祉における余暇の思想—フォルケホイスコレと生活指導教員養成大学の活動をとおして」 『人間学研究』 7, 75-87.
- Uddannelses- og Forskningsministeriet (2017). *Bekendtgørelse om uddannelsen til professionsbachelor som pædagog*.
<https://www.retsinformation.dk/eli/lta/2017/354>
 (情報取得2023.5.1).
- 上田星 (2020) 「男性保育者の子どもへのわいせつ行為の対策について—デンマークからの示唆—」 『国際幼児教育研究』 27, 159-172.
- VIA University College (2019). *Studieordning VIA Pædagoguddannelsen 2019*.
<https://www.via.dk/uddannelser/paedagog/studieordninger>
 (情報取得2023.8.1).
- VIA University College (2023). *Studieordning VIA Pædagoguddannelsen 2023*.
<https://www.via.dk/uddannelser/paedagog/studieordninger>
 (情報取得2023.8.1).